

クレジット:

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2020 武田将明

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



学術フロンティア講義

2020年5月8日

武田将明（総合文化研究科言語情報科学専攻）

30年後の世界

- ▶ 西垣通『AI原論』：「AIが人知を超える」と言われるのは、常に30年後。
- ▶ 30年後、世界から石油がなくなる？
- ▶ 30年：歴史が一回りする区切り
- ▶ 30年前（だいたい平成の始まりに対応）：東西ドイツ統合→ソヴィエト連邦解体、冷戦終結。日本はバブル末期。
- ▶ 希望から幻滅へ？
- ▶ インターネットの普及。生活の変化（流通経済）。
- ▶ グローバル化とその反動（コロナ危機はどう影響するか）。

300年前の世界

- ▶ たしか一六六四年の九月はじめのことだった。近所の人たちと寄り集まって雑談していると、あるうわさを耳にした——ペストがまたオランダに戻ってきたらしい。（中略）このうわさは徐々に絶え、市民の記憶からも消えはじめた。イングランドにいるぼくらには関係なさそうだったし、誤りだったほうがありがたくもあった。ところが一六六四年十一月のどん詰まり、いや十二月のはじめだったろうか、二人の男（フランス人と言われている）がペストで死んだ。場所はロンドンの市街地（シティー）を囲む壁よりも西にあるロングエイカー通りで、より正確にはこの通りとドルリー小路（レーン）の交わる場所だった。二人の死者のいた家は、なんとかして事実を隠そうと努めた。けれども近所からうわさが漏れ広がり、国務大臣の知るところとなった。（中略）検死の結果、死人の身体のどちらにもあの病の徴となる斑点がくっきり現れていたから、二人の死因はペストであるとの見解を医師たちが公にした。（中略）するとその週の死亡報告書には、いつもの書式でこう印刷された。「ペスト2 感染教区1」

ダニエル・デフォー(著)、武田将明(訳)
『ペストの記憶』英国十八世紀文学叢書第三巻
研究社、2017年、pp.3-4より

300年前の世界

- ▶ 五月のはじめだったが、気候はおだやかで、寒暖の変化はあるけどまだ涼しく、市民は希望を失わなかった。強気になれたのは市街地が健康だったからだ。（中略）翌週、つまり五月九日から十六日にはさらに望みが出てきた。ペストの死者は三人のみで、しかも市街地（シティー）とその周囲の特別行政区（リバティーズ）には一人もいなかった。（中略）ぼくらは希望を抱いて数日をすごした。でもそれはほんの数日で終わった。市民はもう報告書の数字に騙されなかった。みずから家々を調べ、本当はペストがすみずみまで拡散し、たくさんの人が日々死んでいることを知ってしまったのだ。こうしてすべての希望的観測は色あせ、事実を隠すことはできなくなった。それどころか、すべてが急に明らかになった。もはや感染は収束する見込みがないほど広がっていることも。またセント・ジャイルズ教区では、多くの通りに病が侵入し、多くの家族がそろって病に伏していることも。

ダニエル・デフォー(著)、武田将明(訳)
『ペストの記憶』英国十八世紀文学叢書第三巻
研究社、2017年、pp.8-9より

300年前の世界

- ▶ これに応じて、翌週の死亡報告でも、真相が姿を見せはじめた。もっともペストで死んだのはたった一四名と記載されていたが、これは完全に歪められ、操作された情報だった。セント・ジャイルズ教区では総計四〇の死体を埋めたが、そのほとんどがペストで死んだのは明白だった。なのに報告書には他の病名が記されていた。すべての死者の数はせいぜい三二名の増加に止まり、全体の死亡報告もまだ三八五名だったけれど、うち一四名の死因が発疹チフス、おなじく一四名がペストだった。こうした状況から、その週にペストで死んだ実数は五〇名にのぼると誰もが見なしていた。
- ▶ ダニエル・デフォー 『ペストの記憶』 1722年

ダニエル・デフォー(著)、武田将明(訳)
『ペストの記憶』英国十八世紀文学叢書第三巻
研究社、2017年、p.9より

300年前の世界

- ▶ ある日、(中略) 好奇心に駆られていつも以上にいろいろ見てまわった。それで用事と関係のない方面をずいぶん歩いてしまった。ハウボンに出ると、通りは人でいっぱいだった。けれどもみんな通りの真ん中を歩いていて、端は両方とも空いていた。どうやらどの家が感染しているか分からないので、外出する人に接近したり、家から漏れる臭気を浴びるのを避けているみたいだった。(social distance?)
- ▶ 人びとができる限りの予防策を講じていたのは間違いない。市場で骨つき肉を一片買うときも肉屋の手から直接受け取ろうとはせず、鉤にかかっているのを自分で外した。また肉屋の方も金に触れようとせず、わざわざ酢を満たした壺を用意してそこに入れさせた。買う側はどんな半端な額でも支払えるよういつも細かい金を用意して釣銭をもらわないようにした。香料や香水の入った壺を握りしめ、その他役立ちそうなものはなんでも用いた。しかし貧民になるとそれさえもできなかったもので、運を天に任せるしかなかった。

ダニエル・デフォー(著)、武田将明(訳)
『ペストの記憶』英国十八世紀文学叢書第三巻
研究社、2017年、pp.22, 98より

デフォー 『ペストの記憶』 (1722年)

- ▶ ここに描かれている人間の振る舞いは、時代・地域を超えて共通。
- ▶ 普遍的な人間の振る舞いを研究するのは、文学など過去の文化を学ぶ際、重要。人文学 (humanities) という学問の根本ともいえるだろう。
- ▶ 今日は、18世紀の文学を通じて「人間」とは何か、を考えたい。
- ▶ 主に取り上げるのは、ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』 (1726年)。

17世紀後半～18世紀前半のイギリス

- ▶ 科学革命：王立協会（1660-）
- ▶ 名誉革命（1688-89）
- ▶ 財政革命：イングランド銀行（1694-）
- ▶ 都市中産階級の勃興／非国教徒（Dissenters）の地位の向上
- ▶ 対仏戦争（1688-97、1701-14）：植民地戦争の側面もあった
- ▶ 二大政党制：the Tories and the Whigs. Robert Walpole (PM: 1721-42).
- ▶ バブル崩壊：南海泡沫事件（South Sea Bubble: 1720）
- ▶ ジャーナリズムの発達：*The Spectator* (1711-12, 1714), *The Review* (1704-13), *The Examiner* (1710-11), *The Female Spectator* (1744-46).
- ▶ 小説の勃興：*Robinson Crusoe* (1719), *Gulliver's Travels* (1726), Samuel Richardson, *Pamela* (1740), Henry Fielding, *Tom Jones* (1749).

バフチン「叙事詩と小説」 (1941)

- ▶ 小説は、まさにその始まりから、中核に時間を概念化する新しい方法を備えたジャンルとして発展した。(中略)まさに初めから、小説は絶対的な過去の遠く離れたイメージではなく、未完結の現在における現実と直に接する領域の中で構築されていた。その中核には個人的な体験と自由で創造的な想像力があつた。ゆえに小説とは、まさにその始まりから、すでに完成していた他のジャンルとは異なる土で作られていたのだ。(中略)つまるところ、小説は自分自身の規範・正典を持たない。それはその本質からして非規範的である。それは可塑性・柔軟性そのものである。それは常に問いかけ、自らを検査し、おのれの確立された形式を評価の対象にするのだ。

→小説とは、ダイナミックに変化する近代に適応した文学形式

Mikhail Bakhtin『Epic and Novel』1941年より

近代イギリス小説

- ▶ 代表はデフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719）
- ▶ 航海者が遭難し、無人島で自給自足の生活。因襲に囚われない人間。自由と自立。個人主義と近代的な人間像。Cf.大塚久雄『近代化の人的基礎』（1948）
- ▶ スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（1726）は、この近代的な人間像を批判的に描いた作品

デフォーとスウィフト



Photo from
Wikipedia

Daniel Defoe (1660-1731)
ロンドンの商家に生まれる。
非国教徒。執筆以外に商売も営む。
新興階級の代弁者
ジョン・ロックの政治思想に近い

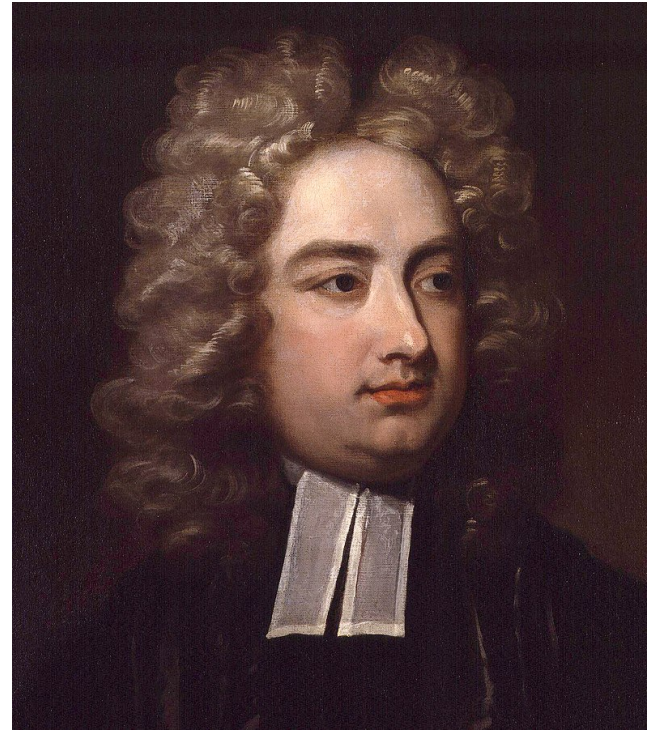


Photo from
Wikipedia

Jonathan Swift (1667-1745)
アイルランド・ダブリン生まれ。
父はイングランドからの移住者。
イングランド国教会の聖職者。
非国教徒には批判的。
保守的な政治信条。

『ガリヴァー旅行記』の構成

- ▶ 第1篇：小人国（Lilliput）
- ▶ 第2篇：巨人国（Brobdingnag）
- ▶ 第3篇：ラピュータ（Laputa）、日本など
- ▶ 第4篇：馬の国（Houyhnhnms-land）
- ▶ この構成の意味？
- ▶ Degeneration of man（人間の退化）
- ▶ Cf. ダーウィン『種の起源』（1859）より前の17~18世紀にも、人間と動物の違いについては、様々な考察があった。

人間と動物の違い（17-18世紀）

- ▶ デカルト『方法序説』（1637）：動物機械論（動物は理性を持たない機械）
- ▶ マルブランシュ：動物には感覚もない

- ▶ コンディヤック『動物論』（1755）
- ▶ ベンサム： [T]he question is not, Can they reason? nor, Can they talk? but, Can they suffer? Why should the law refuse its protection to any sensitive being? . . . The time will come when humanity will extend its mantle over everything which breathes. . . . (Jeremy Bentham, *Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, 1789)

『ガリヴァー旅行記』：小人国と巨人国

- ▶ (小人国の内紛) 事の起こりはこういうことでした。卵を食するにあたっては大きい方の端を割るとというのが太古からの習慣であったことは衆目の一致するところなのですが、現陛下の祖父君がまだ幼少の頃、卵を食すべく古来の慣行通りに割ろうとなされたときに、誤まって一本の指を切ってしまわれた。それをうけて、父君である時の皇帝は、臣民たる者、卵は小端より割るべし、これに違ふ者は厳罰に処すとの勅令を出された。民衆はこの法に憤激し、史書の教えるところによれば、そのために六度の叛乱が起き、一人の皇帝は命を落とされ、もう一人の皇帝は王冠を失われたと言います。こうした内乱は必ずブレフスキュの君主の煽るところとなり、それが鎮圧されると、つねにこの帝国に亡命者が流出したのです。(富山太佳夫訳)

→カトリックとプロテスタントの対立、ピューリタン革命と名誉革命。

スウィフト(著)、富山 太佳夫(訳)
『ガリヴァー旅行記』ユートピア旅行記叢書第6巻
岩波書店、2002年、p.48より

『ガリヴァー旅行記』：小人国と巨人国

- ▶ (巨人国の王との対話) 我が小さき友グリルドリッグ (=ガリヴァー) よ、おまえの祖国讃美は実に美事なものであった。無知、怠惰、悪徳こそが立法者に適わしい資格要件であることを、おまえは明確に示してくれた。(中略) おまえの話から判断するに、おまえたちの国では、何かの地位を確保するのに自分を磨き切ることが必要だとは思えないし、いや、それ以上に、人は徳なくして貴族となり、聖職者は敬虔、学問なくして昇進し、軍人は指揮力、勇気なくして、裁判官は廉直なくして、顧問官は祖国愛なくして、顧問は知恵なくして昇進する。(中略) おまえ自身の話と、あれこれ手を尽して絞り出した答えから推察するに、おまえの国の住民の大半は、自然に許されてこの大地の表面を這いずりまわる邪悪を極めたおぞましい虫けらの族と結論するしかない。

→小人国での諷刺を他人事のように笑っていた読者は、巨人国での激烈な批判の前に凍りつく。スウィフトの(意地悪な)計算

スウィフト(著)、富山 太佳夫(訳)
『ガリヴァー旅行記』ユートピア旅行記叢書第6巻
岩波書店、2002年、p.136より

『ガリヴァー旅行記』：馬の国

- ▶ 小人国での諷刺→巨人国で読者自身に返ってくる
- ▶ ラピュータは外国を舞台にした科学諷刺で、1、2篇の延長として捉えられる
- ▶ 小人、巨人、ラピュータ人：いずれも人間。批判の主たる対象は、18世紀のイギリス（人間一般にも通じているが）
- ▶ 「馬の国」に至って、批判の対象は「人間」そのものへと高まる
- ▶ ヤフー（Yahoos：退化した人間）とフイヌム（Houyhnhnms：理性を持った馬）：デカルトの動物機械論の転倒
- ▶ ガリヴァーはフイヌムの優秀性を認め、ヤフー（人間）を憎悪。帰国後、自分の家族を見ても吐き気を催すほどに。

『ガリヴァー旅行記』：馬の国

- ▶ (ヤフーの貪欲：フイヌムの主人との対話) この国の獣たち (=ヤフー) の不和も、おまえの説明を聞いてみると、元は同じだ。五十匹でも十分に足りるくらいの餌を五匹のヤフーの中に投げてやるとどうなるか (中略)、奴らは大人しく食べるどころか、一匹一匹が全部を一人占めしようとして掴み合いを始める (中略)。
- ▶ (フイヌムの理性) 彼らの大いなる座右の銘は、理性 (Reason) を培え、理性の統治にまかせよ、ということである。彼らにとっての理性とは、ひとつの問題をめぐってああでもない、こうでもないともっともらしく議論できるわれわれ人間の場合と違って、(中略) 直截にひとを得心させるものなのである (Reason . . . strikes you with immediate Conviction)。感情や利害のせいでもつれたり、ぼやけたり、変色したりしない限りは、そうなるはずなのだ。(中略) 誤まった命題、疑わしい命題をめぐって議論、口論、論駁、固執するなど、フイヌムの関知しない悪ということになる。

スウィフト(著)、富山 太佳夫(訳)
『ガリヴァー旅行記』ユートピア旅行記叢書第6巻
岩波書店、2002年、p.274, 283-284より

『ガリヴァー旅行記』：馬の国

- ▶ ファイヌムの「完全」な理性：直感的に真理が分かる。全員が合意して平和に物事が進む。
- ▶ 人間の「不完全」な理性：意見（Opinion）を戦わせる。（ヤフーのように）私利私欲を元にした争いが絶えない。
- ▶ ヤフーは、人間の欲望のカリカチュアであると同時に、スウィフトが考えた人間の将来の悲観的なヴィジョンでもある。
- ▶ スウィフトにとって、近代は人間の欲望が拡大する時代であり、退化をもたらすものだった。変化＝墮落。永遠に変わらないことが理想。
- ▶ ロマン派の詩人・批評家のコールリッジは、ヤフーは人間の一面だけを誇張したもので、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』こそ普遍的な人間（universal man）を描いている、と論評。
- ▶ Q. みなさんは、ヤフーと人間の関係について、どう考えるか？

オーウェルの『ガリヴァー旅行記』論

- ▶ They [the Houyhnhnms] are unattractive because the ‘Reason’ by which they are governed is really a desire for death. They are exempt from love, friendship, curiosity, fear, sorrow and—except in their feelings towards the **Yahoos**, who occupy rather the same place in their community as **the Jews in Nazi Germany**—anger and hatred. (George Orwell, “Politics vs. Literature: An Examination of *Gulliver’s Travels*”, 1946)

→ 『一九八四年』の作者でもあるオーウェルは『ガリヴァー旅行記』第4篇に全体主義の予兆を読みとった。

- ▶ 誰も異論を唱えない社会は、実は誰も異論を唱えられない社会かもしれない。
- ▶ 戦後、この読みに影響を受けた研究が出てくる。ただし、フイヌムに心酔したガリヴァーとは異なり、作者のスウィフトはフイヌム（全体主義）を批判している、と考えられた。
- ▶ Q. 上記の読解は妥当だろうか？

文学が未来を予知するとは？

- ▶ (30年後、どころか200年以上あとの) 20世紀になって、まったく新しい読解の生まれた『ガリヴァー旅行記』。
- ▶ 作者スウィフトは、全体主義国家の出現を予想していたのか？
- ▶ このような「予言」が可能となったのは、スウィフトが常識におもねることなく、徹底的に「人間」の限界を考えた結果 Cf. デカルトの人間観の転倒
- ▶ スウィフト自身の本来の意図とは異なるかもしれないが、彼の想像は（純粹に思弁的な方法とは別の形で）ある種の真理を（本人にさえも自覚できない形で）掘り当てていた
- ▶ もうひとつの「予言」？

Swift, *Gulliver's Travels* (Part IV)

- ▶ I remember, my Master having once made an Appointment with a Friend and his family to come to his House upon some Affair of Importance; on the Day fixed, the Mistress and her two Children came very late; [she explained that her husband died late in the morning]. . . . I observed she behaved herself at our House, as chearfully as the rest: She died about three Months after.
- ▶ “my Master”とは（ガリヴァーの世話をしていた）ファイヌムの主人のこと。
- ▶ Q. この一文のどこが「予言的」なのか？
- ▶ 最後の1文

Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, 1726
Part IV, Chapter IX

文学が未来を予知するとは？

- ▶ 妻は悲しみのあまり、夫のあとを追うように亡くなっている。確かに、死の原因は書いていない。しかしなぜ、この1文を付け足す必要があったのか？
「直感的な理性」が生物の感情を完全に支配することなどできないのだ。
- ▶ つまりここに、全体主義国家という20世紀の壮大な政治実験の失敗が暗示されている、と読むこともできる。
- ▶ これもスウィフトはそこまで考えて書いたとは思えない。しかし、彼の徹底した想像力がこの1節を書かせた。もしも彼が、フイヌムという生物を一貫したデザインの元に（すなわち「理性的」に）構成していたら、この1節は書かなかったはず。
- ▶ この1節を書くかどうかで、文芸フィクションの存在意義、想像力の意義、さらには（完全ならざる／やがてAIに知性で敗れるかもしれない）人間の存在意義も賭けられている。

妄想 . . .

- ▶ 現在のコロナ危機に対しても、何か分かりやすい説明や安易な物語に振り回されるのではなく、想像力を駆使して徹底的に妄想することが、長い目で見れば重要かもしれない。それは常識を裏づけるようなものであってはならない。人間の限界を超えるところまで、狂気とすれすれのところまでいかなければならないだろう。
- ▶ 『ガリヴァー』も（もちろんデフォーの『ロビンソン・クルーソー』と『ペストの記憶』も）、さまざまな危機と変革の中で書かれたもの。
- ▶ コロナ危機もまた、新しい文化を生むことになるのだろうか。30年後の世界が、危機を乗り越えた人々が生み出した豊かな文化によって彩られていることを願いつつ、話を終える。